パラグアイでＪＩＣＡインターンシップ

信頼関係の大切さ実感した

豊岡　優希さん（文3）

日系移民の多いイグアスの雄大な風景

「国際協力は信頼関係が大切だと実感しました。この経験を将来に生かしたい」。文学部英語英米文学科の豊岡優希さん（3年次）は、南米パラグアイで国際協力機構（ＪＩＣＡ）のインターンシップ・プログラムに3カ月間にわたって参加、広報活動に奮闘した。

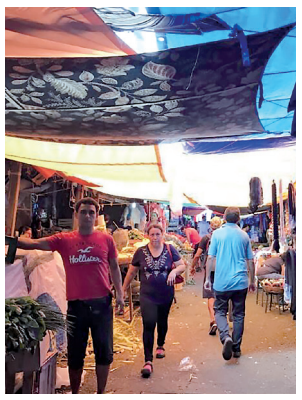
2017年11月、日本から2日間かけて地球の裏側にあるパラグアイへ。豊岡さんの「仕事」はＪＩＣＡから派遣された青年海外協力隊員やシニアボランティアの活動を紹介すること。国内12カ所を訪ね、インタビューや撮影を行い、ユーチューブやフェイスブックなどSNSで活躍の様子を伝えた。

パラグアイの主要産業は農業・畜産。日本からの移民も多い。都市部から農村まで隊員・ボランティアは看護師、日本語教師、農業指導など国中に多数いる。現地の人々と信頼関係を築き、課題解決へ奮闘する姿を豊岡さんは目の当たりにした。

ホームステイ先の家族と豊岡さん（右）

フェイスブックは日本語のほかスペイン語でも掲載した。出国前に70日間のスペイン語特訓を受けたが、「原稿にするのは大変で、辞書を引きながら苦労して書きました」と振り返る。

取材地へはＪＩＣＡ事務所のある首都アスンシオンからほとんど長距離バスを利用した。バスで8時間、道を聞きながら訪ねたところもある。ある時、バスの中で乳児が泣きだした。「乗客全員が寄ってきて赤ちゃんをあやそうとする。日本では見られない姿でした。困っている人がいたら駆け付け、助けようとする人たちばかりでした」。パラグアイでの取材は常に単独行動だった豊岡さんにとって、人々の優しさは大切な思い出だ。



首都アスンシオンの市場

豊岡さんは「あしながの育英会」の奨学生。1年次の冬、育英会の海外研修プログラムでアフリカのウガンダに10日間滞在した。これが発展途上国での国際協力に関心を持つきっかけとなった。文学部では田邉祐司ゼミに所属し、英語の力を磨く一方、日本の英語教育や発展途上国の経済にも興味を持つ。今夏には国内の語学学校などで短期間のインターンシップにも参加した。「さまざまな経験を積んで、国際協力の仕事に就くステップにしたい」と夢を膨らませている。

中期留学生（後期）に10人

2018年度中期留学生（後期）は4コースに10人。社会知性開発コースは、語学研修のあとインターンシップを行う。留学先と派遣期間、氏名、学部学年は次の通り。（敬称略）

英語コース

●ネブラスカ大学リンカーン校（米国、8月13日～12月10日）

▽新保大介（文3）

社会知性開発コース

●ワイカト大学（ニュージーランド、8月7日～12月9日）

▽市川綾花（経済2）▽永渕由梨（文3）▽三嶽茉琴（文2）

中国語コース

●上海大学（中国、9月4日～19年1月6日）

▽深澤宏樹（経済3）▽山口翔（経済3）▽小檜山一輝（商3）

コリア語コース

●檀国大学（韓国、8月7日～12月19日）

▽叶多美柚（法2）▽神戸結（文3）▽菅原ちひ野（文2）

国際交流フェア 10月6日に開催

留学を希望する学生が留学プログラムの説明や帰国留学生の体験などを聞く「秋の海外留学・国際交流フェア～留学と就職～」が開催される。

多くの留学希望者に参加してもらおうと今年度2回目の開催。「就職課による留学希望者のための就職個別相談」や海外からの留学生による自国紹介コーナーもある。

▽日時・10月6日（土）10～13時▽会場・生田キャンパス国際交流会館※入退場自由。

問☎044・911・1250

「トビタテ！留学」第10期生募集

官民協働で留学費用を助成する「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」の第10期生（2019年4～10月出発）を募集中。

海外での異文化体験や実践活動を焦点にした留学を推奨することで国際的に活躍する人材を育てようと、文部科学省が2014年に創設した。学生自身が留学計画を立てて応募、インターンシップやボランティア、フィールドワークなど明確な目的と意欲的な目標に基づく活動が支援の対象となる。

渡航先などに応じ、奨学金、留学準備金などが支給される。

専修大学では、在学生（休学者含む）を対象に、学内選考を経て日本学生支援機構に推薦する。学内応募はウェブ申請のみで、締め切りは9月25日（火）午後5時。

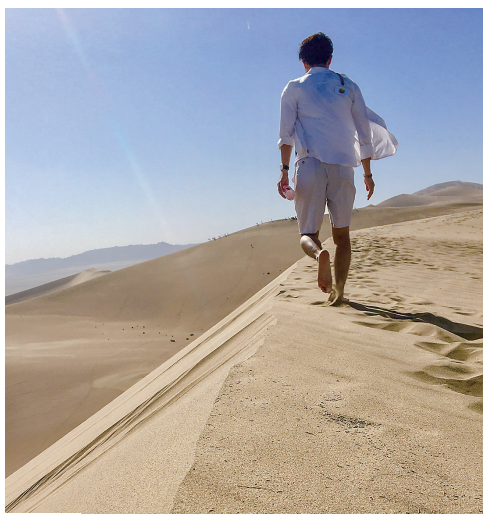
プログラムの詳細や情報は、日本学生支援機構のホームページ（https://tobitate.mext.go.jp/）で。

応募に関する詳細、問い合わせは、国際交流事務課☎044・911・1250まで。

大学生訪中団に参加

宮澤　俊太朗さん（法4）

躍動する中国体感



敦煌で砂漠を歩く

日本中国友好協会が中国政府の要請を受け派遣する日中友好大学生訪中団に宮澤俊太朗さん（法4）が参加し、ダイナミックに躍動する中国の現在を体感した。

訪中団は日中両国の大学生が交流し相互理解を深めることを目的に年に数回派遣。本年度第1陣は6月1～7日、52大学の100人が北京、敦煌、西安、上海を訪問した。

宮澤さんは「視野を広げたい」と参加。初めて訪れた中国の大都市の成長の規模と速さに圧倒されたという。北京と西安では、現地の大学生と学生生活などについて意見を交わした。また、シルクロードの中継地として栄えた敦煌では砂の山を登り「伝統的なところを残しながら発展する国はすてきだと思った」と振り返る。

祖父と共演した宮澤さん（左）＝5月

3年次には内閣府の事業でミャンマーに派遣された。これを機に日本のよさを見直すようになり、祖父で長唄三味線の人間国宝、杵屋淨貢さんから三味線の手ほどきを受けている。「もっと精進し、伝統文化を広く伝えたい」と、前期は国際交流会館に入寮しながら、自宅での稽古を欠かさなかった。年末にはアメリカに短期留学の予定で「視野を広げることと自分の好きなことを両立できるバランス感覚を磨きたい」と話している。

7月21日、留学許可証交付式で。前列右が髙橋裕国際交流センター長

チームの力や成果を高めるために

ある講演会で「心理的安定性」という言葉を知りました。この言葉は、米グーグルが社内の生産性を向上させるためには、何が重要なのかを調査した研究で注目されるようになり、「チームの生産性や成果を高めるためには、本来の自然体の自分をさらけ出せるリラックスした雰囲気のもと、自分の考えや疑問を素直に発言でき、それを受け入れてもらえる環境が大切である」ということです。さらに、このような環境の下では、「コミュニケーションが増えることで目標や方向性が共有される」、「リスクを冒してもチャレンジできるようになる」、「メンバー間での意見対立や衝突があったとしても、更なるプラスの成果を生み出すことができる」とも言われています。

大学において は、学生の皆さんがスポーツ、サークル、ゼミなど、チームで力を結集し、優れた成績や成果を出すことを目標にして日々励んでいます。

これらの活動においては、規律や時には厳しさも必要であるため、すべてが自由に、気兼ねなくとはいかないと思います。しかし、こういったことを意識して諸活動を行っていくことは、社会に出てからも大変役に立ちます。4年間の大学生活の中で、それぞれのチームやグループで何かを成し遂げるという際にはぜひ、心理的安定性を意識した環境作りを心がけてみて下さい。

コミュニケーションをベースとした信頼関係を築いた上で、さらに相手への心づかいや配慮をすることは、ハラスメントを防止する上でも重要なポイントです。

皆さんが日々自然体で活動することができて、チームとしても良い成果をあげることができますように！

（キャンパス・ハラスメント対策室員・丸橋和彦）

神田鳳祭2018
10/6（土）7（日）神田キャンパス
イベント情報は…【実行委員会HP】https://kandaohtorisai.jimdofree.com/
【公式Twitter】@kanda_ohtori